

群 教 ゼ	G01 - 04
	平16.221集

学ぶ楽しさを実感できる国語科指導の工夫

- 読み取りの観点を考える学習を通して -

特別研修員 小内 克敏 (桐生女子高等学校)

《研究の概要》

本研究は古典の学習において、読み取りの観点を考える学習を通して、学ぶ楽しさを実感できる国語科指導を目指したものである。具体的には作品の中から読み取りの観点を探し、それを伝え合う学習を通して、作品に表れた思いに共感・感動したり、友達の考えに触れ、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにしたりすることによって、自己の変容を実感できるように指導の工夫を行った。

【キーワード：国語 - 高 読むこと ことばの絞込み 学ぶ楽しさ 読み取りの観点 古典】

主題設定の理由

平成15年度入学生から学年進行で実施されている新学習指導要領改訂のねらいや、第15期中央教育審議会の答申の趣旨を踏まえると、私は、高等学校の国語の授業においても、自分たちで問題を発見し、友達同士で話し合ったり、聞き合ったりしながら学習を進めていく場を設定することが必要であると考えます。しかし、日々の私の授業において、そのような指導は実践できていない。大部分の生徒は予習をきちんとし、授業中は説明を聞き、黙々とノートを取る。指名されれば、返事をして答える。だが、そこには生徒が学習の主体として活動していく様子は余りうかがえない。本来、本校の生徒は活動的であり、発想も豊かである。それは、「すずかけ祭(文化祭)」において、各クラスで研究のテーマを設定し、調査・追究・発表する過程や、歴史上に輝く女性の生き方をテーマにした体育祭における創作ダンスに生かされている。それらの手法は、学校の伝統・文化となり、生徒たちに脈々と受け継がれている。しかし、それが授業場面となると、一転してその姿は影を潜めてしまうのである。

その現状を打破するために、授業改善を行いたい。私は今まで「大学受験に向けてより多くの知識を伝えたい。」との思いで「これは、こうだ。」と教え込む面を重視してきた。しかし、このような教師主導の知識教授型の学習形態が、生徒の活動的な面、発想の豊かさを抑えてしまっていたのである。そこで、授業の中に読み取りの観点を考える学習を取り入れ、作品を文章表現に即して、自分の体験に照らし合わせて読み、また生徒相互の読みを交流する学習を進めていく場を設定することを考えた。

この学習は文章教材全般で実践できるが、本研究では、その実践は古典の授業とする。その理由は、古典の授業では特に、教師から生徒への一方通行的に知識を受け渡すことが中心になってしまっているからである。今までのような文法に沿った解釈中心の授業を反省し、口語訳が終わればそれで終わりという学習形態を改めたいと考えたからである。生徒自身が作品の中から読み取りの観点を探し出す。さらに、その観点を選んだ理由を書く。また、その観点を選んだ理由を書いた文章を読み合う学習を取り入れれば、自分一人の読みでは見いだせなかった新たな視点に気付くようになるだろう。この学習過程において、作品の内容に共感・感動したり、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにすることによって、自己の変容を実感できるのではないかと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

古典の学習において、学ぶ楽しさを実感できる生徒を育てるために、読み取りの観点を考える学習を取り入れたことの有効性を明らかにする。

研究の見通し

- 1 作品を読み取る場において、読み取りの観点を探す学習を取り入れれば、文章表現に即して、自分の生活体験と照らし合わせて読むようになり、登場人物や作者の思いについて共感したり、感動したりすることができるだろう。
- 2 自分の考えを発表する場において、読み取りの観点を伝え合う学習を取り入れれば、自分一人の読みでは見いだせなかった新たな視点に気付くようになり、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにすることができるだろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 学ぶ楽しさを実感できるとは

学習場面において、生徒自身が作品を文章表現に即して、自分の生活体験と照らし合わせて読み、作者や登場人物の思いに、共感・感動したり、生徒相互の読みを交流して、自分一人の読みでは見いだせなかった新たな視点に気付くようになり、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにすることを通して自己の変容を実感できることである。

(2) 読み取りの観点を考える学習とは

本研究の読み取りの観点を考える学習とは、読み取りの観点を探す学習・読み取りの観点を伝え合う学習のことを指す。生徒はこの二つの学習活動を通して、読み取りの観点を考える力を培うことで自己の変容を実感できるのである。

読み取りの観点を探す学習とは、作品の中から重みのあることばを探し出して、そのことばを取り上げた理由について、友達を説得する文章を書く学習である。友達を説得する文章を書くためには、根拠となるものがしっかりしていなくてはならないため、生徒たちは文章表現に即して、自分の生活体験と照らし合わせて読み、登場人物や作者の思いについて共感したり、感動したりすることになる。

また、読み取りの観点を伝え合う学習とは、読み取りの観点を探す学習で書いた文章を読み合う学習である。重みのあることばは、生徒一人一人によって違うものである。また、同じことばを選んだとしても、そのことばを選んだ理由には生徒固有の理由があるはずである。相互の読みを交流する過程で、生徒は自分一人の読みでは見いだせなかった新たな視点に気付くことになる。

2 研究の方法

(1) 研究実践の計画

対象	桐生女子高等学校2年2組38人	期間	10月上旬	時間	4時間
単元	ことばの花束を作ろう	教材	伊勢物語 「初冠」		
抽出生徒					
A子	古文に関心をもっているが、古典の面白さを感じ取り、学習を深められる段階には至っていない。				
B子	予習等、指示されたことはきちんとできるが、進んで古典を読もうとする態度は育っていない。				

(2) 検証の方法と見通し

見通し	検証場所	検証の観点	検証方法
見通し1	作品を読み取る場	読み取りの観点を探す学習を取り入れ、重みのあることばを探したことは、国語に対する興味・関心を喚起し、作品を日常の体験と照らし合わせながら読むことにより、登場人物や作者の思いに共感したり、感動したりすることに有効であったか。	観察。 作品の中から重みのあることばを探し出して、そのことばを取り上げた理由について書いた文章の分析。 学習後の感想文を分析する。
見通し2	自分の考えを発表する場	読みの観点を伝え合う学習を取り入れ、重みのあることばを伝え合ったことは、友達の読みや思いに触れることにより、ことばに対するものの見方・感じ方・考え方を豊かにすること有効であったか。	観察。 学習後の感想文を分析する。

研究の展開

1 本単元で育てたい言語能力 作品を読み取る観点を絞り込む力

2 単元名 ことばの花束を作ろう 教材 伊勢物語 「初冠」

3 教材の考察

今回、学習する『伊勢物語』の初段「初冠」は、詠歌によって発揮された、若い男の熱烈な風流心と初々しい恋心が描かれた内容である。「恋」がテーマになっているということで、日ごろ、古文に対してとっつきにくさを感じている生徒でも比較的、興味をもって読み、登場人物や作者の思いについて、自分の考えをもつことができるのではないかと考える。

4 指導計画

(1) 単元の目標及び評価規準

目標	作品を読み取る観点を絞り込む力を育成する。	
評価規準	国語への関心・意欲・態度	登場人物や作者の思いを、文章表現に即して、日常の体験と照らし合わせて読み取るようとしている。
	読む能力	作品を文章表現に即して、日常の体験と照らし合わせて読み、登場人物や作者の思いに共感・感動している。
	言語事項	登場人物や作者の思いを描き出している地の文や和歌のそれぞれの文語のきまりを理解している。

(2) 指導と評価の計画 (全4時間予定)

過程	主な学習活動	時間	学習への支援	評価規準		
				国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語事項
	省略	1				
見通し1	作品の中から重みのあることばを探して、そのことばを取り上げた理由を書く。	2	理由については相手を説得するための根拠がしっかりしていなければならないことを伝える。 自分の考えを書くのに必要な文章展開の型を提示する。	(おおむね満足とする状況) 自分のところに響き、重みを感じることばを探そうとしている。 (十分満足とするキーワード) ここに響き重みのあることばと感じたことばの背後にある深い思いや願いを考えながら。 (努力を要する状況への方策)	(おおむね満足とする状況) 作品の中からここに響いたり、重みを感じたりしたことばを探してそのことばを取り上げた理由を書いている。 (十分満足とするキーワード) 確かな根拠となるものを押さえて。 (努力を要する状況への方策)	(おおむね満足とする状況) 思想や感情を描き出している表現や和歌の修辭などの文語のきまりについて理解している。 (十分満足とするキーワード) 文語のきまりについての確に。 (努力を要する状況への方策) 文語のきまりを理解す

				<p>普通の生活の中でこころに響いたり、重みを感じたりすることばに出会った経験と重ね合わせながら探そうという意識をもたせる。</p>	<p>こころに響いたことばや重みのあることばを探せない生徒には文章中の重要語を例示する。理由が根拠となるものに基づいていない生徒には、なぜそう感じたのかを質問する。</p>	<p>ることのできない生徒には、文語文や和歌の特徴などについて改めて示す。</p>
見 通 し 2	<p>前時に書いた文章をグループで読み合う。 自己評価表に学習後の自分の思いを記入する</p>	1	<p>自分一人の読みでは見出せなかった新たな読みを発見することを意識しながら読むよう支援する。</p>	<p>(おおむね満足とする状況) 進んで文章を交換して読んでいる。 (十分満足とするキーワード) ものの見方・感じ方・考え方を豊かにしようとしながら。 (努力を要する状況への方策) 友達の文章を読むことにより、自分の考えを豊かになるということを伝える。</p>	<p>(おおむね満足とする状況) 自分一人の読みでは見出せなかった新たな読みを発見し、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにしている。 (十分満足とするキーワード) 理由の根拠を意識しながら。 (努力を要する状況への方策) 自分の読みに欠けている点をメモしてみるよう助言する。</p>	

研究の結果と考察

1 作品を読み取る場において、読みの観点を探す学習を取り入れ、重みのあることばを探したことは、国語に対する興味・関心を喚起し、作品を日常の体験と照らし合わせて読むことにより、登場人物や作者の思いについて共感したり、感動したりすることに有効であったか

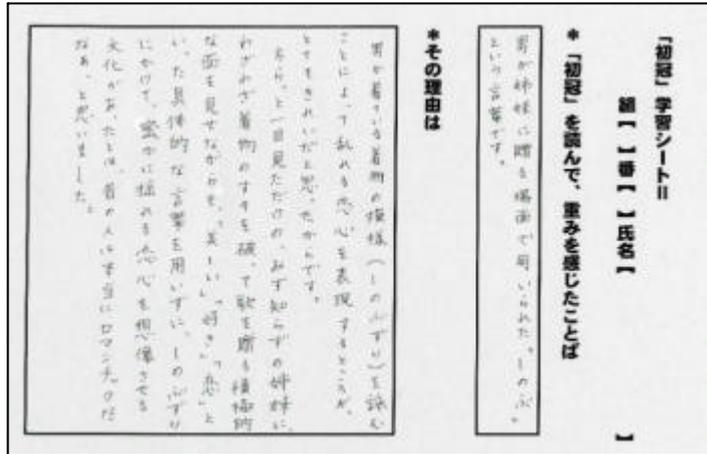
授業の初めに黒板に「ことばの花束を作ろう」と大きく書いた。きょとんとしている生徒に『伊勢物語』の「初冠」の段を読み、文章の中から重みのあることば(花)を探して、それを取り上げた理由を書いた文章をグループごとに冊子(花束)にしようと投げかけた。授業後の感想に「いつもと違う授業の進め方で、最初は戸惑ったけれど、一人一人が授業に参加できて面白かった。今日、1時間、新鮮で楽しかった。」とあり、「意欲的に取り組めたか。」という学習後の自己評価の項目には38名中36名が「そう思う」と答えているところから、生徒たちのことばについての興味・関心が喚起されたことがわかる。

A子は、1時間目に行った、ふだんの生活の中から重みのあることばを探す活動において、なかなか思い出すことができなかった。ただ、「思い出せなかったことで、日ごろ、いかに自分がことばについて意識していなかったことを自覚した。」と話してくれた。授業後には「言葉って重要だなと改めて思った。ふだんの授業で考えられなかったことを考えることができてよかった。『初冠』は読みにくかったけれど、すらすら読めるよう、家でも読もうと思った。」と感想に書き、学習に対する意欲をのぞかせている。次の授業では、図書室から、俵万智の『恋する伊勢物語』を借りてきて、古典常識を理解するのに参考にしていた。そして、重みを感じたことばとして「狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる」ということばを選び、人に思いを伝える方法の違いについて、当時の人と今の自分を照らし合わせ、選んだ理由を書くことができた。授業後の感想には「男が破った衣に歌を書いたところが、キザだなあと思った。昔の人は短歌で自分の気持ちを伝えたとはすごいなと思いました。今はメールとかあるから、ラブレターとか書かなくなっていて、少しさみしい気持ちになった。昔の人の情熱が伝わってすごいなと思った。自分が思った重みを感じたことばを探することで、いつも深く考えなかったことを考えることができた。やっぱり、言葉には深い意味があるんだなと改めて思った。」と自己の変容を

書いている。この記述や上記した授業にのぞむ姿勢から、A子が古典に面白さを感じていることを見とることができた。

B子はまず、ふだんと授業形態が違うことについて「今日はいつもの授業と違っていて、新鮮さがあって、面白いなあと思った。」と述べている。ふだんは黒板に書かれたことをノートに写すだけで満足していたような感

資料1 B子のプリント



じだったB子が、次の授業では、「初冠」の中の和歌の解釈について質問してきたことから、この学習に意欲的に取り組んでいることがわかる。そこでこの和歌に含まれている掛詞について説明をした。すると、B子は重みを感じたことばとして「しのぶの乱れ」ということばを選んだ。その理由を今と昔の恋愛表現の違いに視点を置いて書くことができた(資料1)。

授業後の感想には「今日、訳をしていてだんだんその話の内容が理解できると、何だかおもしろくなってきました。男は、姉妹に短歌を贈る時に、自分の狩衣を切って、そこに歌を書いたのが、印象的でした。そういう大胆な面をみせながらも『好き』などという具体的な言葉を用いずに揺れる恋心を『しのぶの乱れ』と表現する姿に感心しました。自分で見つけた重みのあることばについて、自分なりにいろいろと考えられて本当に勉強になったと思います。一つの言葉についてこんなに考えたことはなかったし、こういった学習も非常に良いなあと思いました。意欲的に取り組めたと思います。」と自己の変容を書いている。こういった感想や前述した授業中の言動から、B子の進んで古典を読もうとする姿勢を見とることができた。

以上のことから、重みのあることばを探す学習を取り入れたことは、作品を日常の体験と照らし合わせて読むことにより、古典に対する興味・関心を喚起し、登場人物や作者の思いについて共感したり、感動したりすることに有効であったと考える。

2 自分の考えを発表する場において、読みの観点を伝え合う学習を取り入れ、重みのあることばを伝え合ったことは、友達を読みや思いに触れることにより、ことばに対する見方・感じ方・考え方を豊かにすることに有効であったか

重みのあることばを探して、それを取り上げた理由を書いた文章をグループで読み合う学習を行った。机を移動させ授業を受けるということは、生徒にとって高校入学以来初めてのようである。生徒たちが「どんなことばを選んだの」と聞き合いながら机を移動している様子から、これから始まる授業に対する期待が感じられた。それは、授業後の自己評価の「意欲的に取り組めたか」という項目に38名全員がそう思うと答えた事実が証明している。グループを作る時には騒がしかった教室も、いざ文章を読み始めると静まり返り、友達の書いた文章を真剣に読み合っていた。グループの中の読み合いを一度行ったが、生徒からの要望もあり、グループのメンバーを変えて、時間の許す限り、読み合う学習を行った。授業後の感想にも、「高校に入ってから自分の考えを発表する機会が少なかったように思う。そのため、なかなかやりにくいところもあったけれど、古典での意見のやり取りは人それぞれでいるんな考えを持っていて、しかも納得させられるものだったので、自分の見方も広がったように思う。」や「今までは受け身の授業だったけれど、今回は自分から訳したりと受け身ではなくなりました。ただ訳して文法を勉強して、というのではなくてお互いの考えを聞き合ったりできたのでとても良かったです。」

と生徒が古典の学習に対して満足していることがわかる感想が書かれている。

A子は終始、笑顔で、読み合う学習に取り組み、「こんなふうに思ったんだ、素敵だな」などと友達の文章にコメントしていた(資料2)。また授業後には「自分と同じ言葉を選んでいただけ、また私と違った感想が書いてあり、人それぞれ感じるのがちがうのだなと思いました。気が付かなかったところに目を向けている人もいて、なるほどとうなずいてしまうものばかりでした。自分の意見に対してもみんなが感想を言ってくれてうれしかったです。」と感想を書いている。「どんなふうにうれしかったの」という

資料2 A子のグループが読み合う様子



教師の問いかけに「友達の感想から、自分の考えが友達の考えに影響を与えたことがわかって、何だかうれしかった」と答えている。これらのことからA子のものの見方が広がったことや、A子の考えが友達のものの見方を広げたことを見とることができた。

B子はグループの中心になって活動していた。「今日は、はりきってるね」という教師の問いかけに「できるだけ、いっぱい、読みたいんです」と話してくれた。授業後の感想に「みんな、重みのある言葉が違ったり、また同じ言葉でも人によって感じ方が違ったりしてなんだかおもしろいなあと思いました。」と書いている。「どんなふうに面白いの」という問いかけに「ことばを選んだ理由の違いに普段考えていることが出ていて、友達とより深く知り合うことができた」と答えてくれている。これらのことからB子のものの見方・感じ方・考え方が豊かになったことを見とることができた。

以上のことから、重みのあることばを伝え合う学習を取り入れたことは、友達の読みや思いに触れることにより、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにすることに有効であったと考える。

研究のまとめと今後の課題

今回、古典の授業の中に読み取りの観点を考える学習を取り入れた。この学習において、生徒は、文章表現に即して、日常の体験と照らし合わせて読み、登場人物や作者の思いについて共感・感動することができた。また、自分一人の読みでは見いだせなかった新たな読み気付くことによって、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにすることができた。以上のことを通して、自己の変容を感じることもできたのである。これらことから、学ぶ楽しさを実感するために、古典の授業の中に読み取りの観点を考える学習を取り入れたことは有効であったと考える。

今回の授業は従来の知識教授型の授業形態でなく、生徒が考え、活動する場面を多く取り入れた。生徒が主体的に学習を進めている授業中の様子や、授業後の生徒の感想には楽しく学習できたという記述が多く見られたことから、一定の成果を得ることができたと思う。今後、活動あって成果なしの^{かんせい}陥穽に落ちないように、授業中の活動における学習内容の評価をさらに工夫していくことが本研究の課題である。

<参考文献>

- ・森本 哲郎 著 『ことばへの旅 上・下』 PHP研究所(2003)